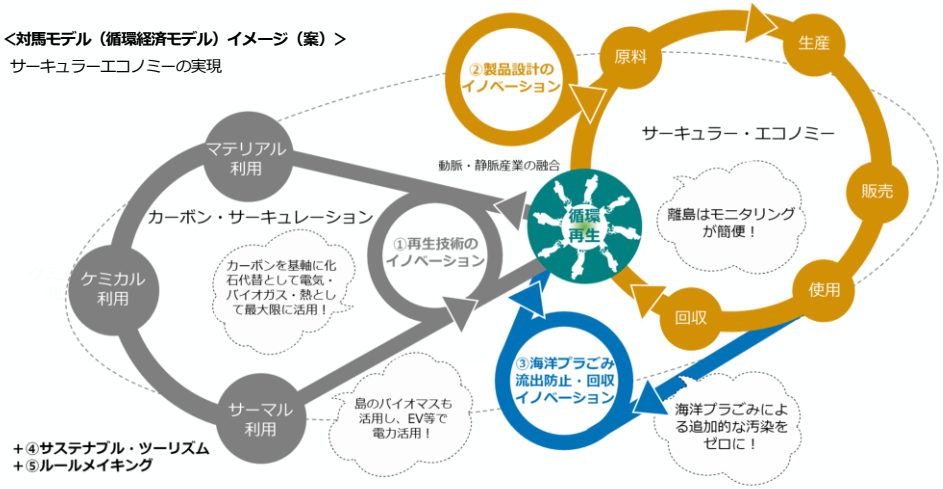
サーキュラーエコノミーアイランド対馬



図：対馬市

Outline　「SDGs未来都市」にてサーキュラーエコノミー活性化を掲げる

【背景・経緯】

国境離島の対馬は、海流や季節風、南北縦長の地形等の地理的・気象的条件、外部不経済や気候変動等の要因が重なり、日本で一番多くの海洋ごみが流れ着く島となっている。対馬だけでの根本解決は困難。

【実施方針】

2020年内閣府より「SDGs未来都市」に選定。第１期SDGs未来都市計画では、対馬の産業・経済の基盤である「環境」について、企業等の参画を促し、サーキュラーエコノミー（循環経済）を高めることで、「持続可能な産業」に移行させることを明確に打出す。環境・社会・経済の諸課題に対して SDGs の視点で総合的に取り組みを進めている。2022年に「対馬市 SDGs アクションプラン」を策定し、重点アクションや実行のための仕組みづくりを明示。2023年より第２期計画に基づき取組を推進している。

○第２期SDG s 未来都市計画における取組課題

（７つの重点アクション） １ 地域共生社会、２地産地消、３持続可能な農林水産業、４サステイナブル・ツーリズム（持続可能な観光）、５ゼロ・ウェイスト（対島のゴミをゼロに）、６気候変動対策、７域学連携

（３つの土台） 対馬島しょ生態系・風土・歴史文化・アイデンティティの保全、SDGs推進の仕組みづくり・人づくり、正義

Point①　「対馬モデル」の社会実装に向けた企業連携とその発信

2022年、対馬市、サラヤ(株)、(株)関西再資源ネットワーク、NPO法人ゼリ・ジャパン、(一社)関西経済同友会とで連携協定を締結し、「対馬モデル（循環経済モデル）」の研究開発に着手。また、80社以上が参画し社会課題解決を目指すアクション・プラットフォーム (一社)ブルーオーシャン・イニシアチブ（BOI）と「ブルーアイランド・プログラム」を展開し、対馬をフィールドとして各企業が持っている知見・技術を新結合させることで「2050年：世界最先端のサステナブル・アイランド」になることを目指している。それらの成果は2025年の大阪・関西万博でNPO法人ゼリ・ジャパンが出展する民間パビリオン「BLUE OCEAN DOME」等で発表される予定である。

また、対馬モデルの具体的な行動開始のため、2024年、サラヤ(株)は子会社「ブルーオーシャン対馬」を対馬市内に設立した。

Point②　海洋プラスチックごみ問題の自分ごと化を促す「SDGsスタディツアー」

対馬市は、SDGs推進の基盤としてESD（持続可能な開発のための教育）を積極的に推進。その一環として、対馬の海岸視察や清掃ボランティア、海洋ごみの処理施設見学、ふりかえりワークショップ等を行うSDGsスタディツアーを島外企業・団体に提案し、誘客を図っている。ツアーを通じ、各業種・業態において、本業を通じた海洋プラ問題解決へのアプローチを双方で協議している。

Point③　消費者と対馬の海をつなぐメッセンジャーとしてのマテリアルリサイクル・プロダクト

島内で回収された海洋プラスチックは、島内のリサイクル施設に集積され、そのうち硬質プラスチックについては、減容のため破砕処理されている。再資源化可能な破砕フレークは、島外のリサイクラーによってリペレット化された後、各メーカーによってボックスやバスケット、ボールペン、フライングディスクなどの原料として活用されている。これらのプロダクトは、多くの消費者へ対馬の海の現状や取組を伝えるメッセンジャーとしての役割を担うとともに、売上の一部は企業版ふるさと納税等を通じて、海洋ごみ対策費として対馬市へ還元され、サーキュラーエコノミーの活性化につながっている。

●対馬オーシャンプラスチック製品

写真：株式会社リングスター

●関西経済同友会による対馬スタディツアー

写真：対馬市